

眞生

第九卷 第八號

佛教の理想と國民の信仰

- 佛教の理想は解脱にあり、涅槃にあり、成佛にある。乍然國民の信仰が果してどこまでそれを本當に理解したであらうか。
- 少くとも多くの民衆は之を充分に理解することはできなかったやうである。従つて、各宗の祖師方が之を説いてゐるにかゝらず、多くの民衆は殆ど之を解しない有様である。
- だから成佛云い往生と云い、解脱と云つても、それはたゞ民衆の心に受け入れられる程度の考へに過ぎぬので、それがどの点まで本當に佛教本來の教が受入れられてあつたかはよほどの反省を要することである。
- 乍然日本の國民はいつも大部分が之を自分の信仰にたどり、又それを自分の生活に一致すべく求めた爲めに、多くの印度民族や支那民族のそれに比ぶれば割合に實際的信仰に生きてゐる傾きがある。
- 従て、民衆の生活と信仰とはそれだけ本當の佛教を解するには未だ民心が進まなかつた感がある。
- 此の意味からして、今までの日本佛教は必ずしも民衆のすべてが本當の佛教の信者とは云へない。従つてまたそれだけ本當の佛教が盛んであつたとは云へないものがある。
- こゝに於て、眞の意味の佛教はむしろ之からではないかと思ふ。即ち今後の佛教こそは所謂釋尊の眞意を体し、各宗の祖師方の眞に求めて止まなかつたやうな眞の佛教が成立すべきであらう。(念)

目次

佛教の理想と國民の信仰

念

『志』

魁 子

眞の宗教

土屋觀道

最高峰を目がけて

中村辨康

念佛の種々相

土屋觀道

唐澤の集い

土屋觀道

吾朋便り

昭和第五唐澤別時三味會名簿

□我々の過去の文化は、兎に角敗けまい、相手を驚はさう、そして自分獨り勝たうといふ争闘意識で以て、進んで來ました。而し「闘争主義」が大行詰りに行詰つて來たのです。

□第一經濟的に見ても企業家は金融家と結託して、なるだけ生産費を少くして生産高を多くせようと思つて、無闇と機械力を使つて労働者の頭を切つた。結局一時は夫等資本家達の利益にはなつたが、失業者の増加は金無しの増加で、購買力の減退となり、一番困つて來たのは夫等企業家と銀行家なごである。

□世界的大不景氣の根本原因は何かと云へば、利己主義、獨專主義の結果で、全一的綜合的進化といふ事を忽せにした爲めである。

□だから單なる階級闘争や、利益分配の争奪が産業問題への主題でなく、新しき生産過程に對する科學的發明や、統制政策の樹立なきが來たるべき合理主義であります。

□今迄の文化は經濟も、教育も、藝術も、政事も、宗教も、皆「金」を得るが爲めの手段であつた、もう一つ云ひ換へると「生活費」を得るが爲めの文化であつた。然し今後は生活費の獲得が、社會科學の發達と共に、もつと樂になり、人間それ自体への幸福として純正文化の發達が發輝せられると思ひます。

□斯かる大轉化と、大試鍊に遭遇してゐる大過渡期に於ては、一層宗教的訓練が要求されて居ります。最早個人的安慰の爲めの宗教ではなくなつて來ました。

(魁)

『志』

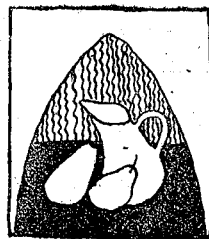
○私達が御禮のうれしきをするのに「これはホンノ私の志ですが——」と云ふて出しますのは面白い事だと思ひます。○金は僅か二圓、三圓でも、品物は僅か紙一帖、石鹼一箱でも、御禮したいと云ふ心持が、品物になつて現れた一圓す。出す方も頂く方も、品物を見ず「志」を見るから、心と心が結び合つて一つになり、本當に有難いのです。○或る方が、信仰の集りで「皆さんが大變汗をかれますから、手拭を一本づつ貰つて頂き度い」と供養せられました。皆が「有難う御座います」と頂戴したが、後で一番先達の方が泌々迷惑せられました。

「今日は皆さんが手拭一筋宛を貰つても、心から下さつた方の前へ御禮を申される方が多い。又如來様の前へ御禮を申される方が多い、誰がタゞで手拭一筋も貰へます。又如來様の御禮があればこそ供養する人があり、供養されたんじゃないですか、それを一言も心から如來様へ御禮申さずやなし、供養の主へ御禮を云ふぢやなし、私は本當に勿体ない事だと思つて今も泌々如來様の前へ御詫びしてゐるさうです」と

○私達はこれを聞いて、今更のように懺悔し、一々如來様と供養された方の前へ手を突いて御禮を申しました。○私は此時初めて「志」と云ふ事を知りました。「物」の陸についてゐる好意——お慈悲といふものがあります。いや好意——お慈悲がそつといふ「物」となつて私達の前へにどり出てゐるのです。此品物となつてゐる「元」を見ればならぬ、其「元」が生命でした。此「元」がお金になつたり、反物になつたりして私達の前へ現れるのです。だから其反物やお菓子箱が尊くなるのです。

○釋尊やキリスト、法然上人や親鸞聖人の御言葉も、たゞの言葉として見や何の事もないが、そう云ふ御言葉が出る前に、そつといふ實の生活があつたのです、だから其御言葉に千鈞の重みがあるのです。そして信仰とは先哲が「古人の趾を求めず、古人の求めたる處を求めよ」と云はれたように、自分もそつ云ふ生活にまでなることです。

(魁子)



眞の宗教

土屋 觀道

一、宗教の種々相

□私はたくさんの宗教の中でどんな宗教が一番正しい宗教であるかと云ふことを常に自ら研究し反省しつつある一人であります。かう云ふ意味に於て、私は一つの宗教研究者と云つてもよい。

□乍然私の宗教研究は所謂單なる宗教學者のそれではなく、私自らの宗教として、それを常に最も正しく、最も價值あるものとせんが爲めの研究であります。謂かへれば此の世で一番正しい本當の宗教を自ら信せんが爲めでありませう。

□然らば一体どんな宗教が一番正しい宗教でありませうか、そしてその一番正しい宗教と云ふものが今日の既成宗教の中に果してあるであらうか、私はかうした意味に於て、一方には今日の既成宗教のいかなるものかを研究し、また同時に、私自身の眞に信することのできる宗教がどれであるかを眞に求めて止まぬものであります。

□然に打明けたところ、此の世に宗教と云ふものは非常にたくさんありまして、そこには極めて原始的な宗教から、最も進歩したと思はれる現代人の文化的宗教があり、其の數殆ど無數と申してよいのであります。乍然此の中に於てどの宗教が果して一番進んだ宗教でありませう。

□一面から云へばどの宗教でも宗教でない宗教はありません。乍然それらの宗教の中に於て、どんな宗教が一番私共の信するに足る宗教であるか、又其の中に於てどんな宗教が一番將來に於ても發展すべきものであるかは一應私共の考へて見るべきものではないかと思ふのであります。

二、宗教の利用者

□それについて、私の最も遺憾に思ふのは世の多くの人々が本當の宗教そのものの味を知らないで、それによつて宗教ならざる他のものを得やうとする人の多いことであります。之は未だ眞の宗教を知らない人としてはそれも亦無理からぬことでありますが、乍然その爲めに、眞實の宗教を失ひ、反つて折角の人生を永久に無にするこゝとはいかにも残念至極なことでもあります。

□例へば宗教を信すれば健康になるとか、惡事災難が逸れると云つた風に、其の宗教を信することによつて其の福德を滿たさうとする教えの如き、所謂宗教を信することによつて、幾多の利得を現世に得やうとすることでありませう。

□乍然之は恰も道德を説く上に於て、道そのものを樂しむのではなくして、それによつて、自分に歸つて來るあるものを目的した行爲の如く、即ち一種の功利主義的宗教でありまして、宗教そのものに對する眞實の信仰とは云へないのであります。

□尤も嚴密な意味に於て、今日の道德なるものがその道德によつて結果するところのものがなくして眞の道德なるものが成立するかどうかと云ふことは一つの疑問であります。而も寸毫の功利を伴はない道德が此の世にあらうとは思へないのでありますが、功利を主とした道德の出發と、功利を主とせず愛他の上に自分を働かした道德行爲とは其の發動の動機に於ては異なる如く。

□同じ宗教に於ても、それを信じたる結果としては可なり、現實的生活の上に多くの利益を持ち來

たすことがありまして、それを目的とする宗教と、それ以外に更に宗教の使命を中心として働く宗教とはそこに自ら根本の相違あることは之を認めなければなりません。

三、誤られたる一つの生活

□此の意味に於て私は多くの宗教が現世利益を中心として肉慾と財慾とを充さんが爲めに宗教を利用する人のあるのを衷心から惡まざるを得ないのであります。所謂之等の人は未だ本當の宗教を知らずしてその宗教によつて、自分の貧慾を充たさうとしてゐるのに過ぎぬからであります。

□それかと思へば一から十まで此の世を否定して、一切の肉慾と財慾とのすべてを厭離しひとへに此の世を罪惡視して人生の一生をたゞ死後の淨土にのみその樂しみを置かうとするが如きも亦一つの誤りであります。

□何となればいかに此の世がいどはしい世界だと申しまして、一度如來の慈光を蒙り、如來のまたなき大悲本願の心に合掌し得たからにはたとひ煩惱具足の凡夫には違ひないとしても、そこには又限りなき如來の慈光が私共の心の裡に一切の苦惱を脱するものとしてあるべきであるからであります。

□従つて、そこには今までにない所謂信仰の生活が如來を中心として始められてゐるからであり、此の世をはかなうとしてもはかなむことのできない、永生の望みと喜びと力との生活が絶大の力を以つて發展し來るものがあるからであります。

□此の意味に於て、未來を喜ぶ生活の安定は永劫にかけて永生の自覺となり、永生の自覺は延てまた現實の生活の改善となつて、其の結果は自ら身心の健康を來たし、物質生活の上にも正しき利用が自ら開かれて來べきであるからであります。

□然に從來の宗教はともすれば此の二者の關係が充分にとれないで唯一方に傾く弊がありました。

即ち現世利益を主張する側には一にも二にも物質生活に捕はれて、神佛を信じ、或は之を禱ることによつてのみ、或は身心の病氣を平癒し、或は惡事災難を逸れて家内繁榮商賈繁昌を求むる如き、さうでなければ反て極端に此の世を否定し一切の禱りを排斥して一切を此の世の業と諦め、たゞ一心に未來淨土の往生をのみ願ふ人のみが多かつたのであります。

四、マルクス論者

□ところが、今一つ此の外になつたものは所謂マルクス一派の宗教否定であります。此の論者は前の二つに比ぶれば全々その性質を異にするものでありまして、此の人達は初めから宗教を一種の迷信として之を否定するのであります。

□否、それどころか今日のマルクス主義者は宗教を一種の迷信として社會の進歩に害毒を流すものなりとして之を否定さへするのであります。其の否定の理由は凡そ宗教の發生は或る時代の發達過程に於ける一種の產物に過ぎないものであつて、それは一種のブルジョア階級の都合よき一つの發生物であり、今日の社會民衆の爲めには有害無益であるとなすのであります。

□乍然之は主としてマルクスが其の當時に於ける、所謂中世時代のクリスト教の弊害を見て此の言を爲したものであつて、所謂クリストその人のクリスト教についても之を謂うるかは疑問であり、殊に釋尊の生活と釋尊の佛教に於ても之を言い得るかは更に一つの疑問であります。

□何となれば少くともクリスト自身の宗教と佛教そのものに於ける釋尊の生活とは寧ろマルクス主義者の反對するその説に一致するよりも反つて一種のマルクス主義に接近するものゝ方が多いからであります。

□加之、所謂マルクス主義の主張する、社會主義理想の如きは反つてマルクス主義によつて實現する

よりも、佛教やクリスト教によつて實現する方が眞實の理想に近く、又その實現性も充分に可能であるかに思へる點が多いからであります。

□このことは少しく佛教そのものの、何ものであるか、又クリスト教そのものの、いかなるものであるかを研究してそれを以つてマルクス主義と比較し來るとき其の節の出發點に於て大いに異なるものゝあるにかゝはらず、その結果に於て、民衆の幸福を中心として、社會改善の平等主義に到つては甚だ一致するものが多いからであります。

五、マルクス主義と宗教

□乍然マルクス主義と宗教との異なる所は彼は主としてそれを物質主義から出發し、之は主として精神主義から出發してゐると云ふ點にあります。そしてまた、彼がそれを必然的社會の流れとして當然來るべきものとして之を自然の成行きとして見てゐるに對して、之は寧ろそれに反して然らしむべき理想主義に立つて之を見る點にあります。

□一は神學的であり、一は理想的であります。そしてまた一は之を客觀的に政治的に政策的に自よりも他の現はして行かうとするのに對し、之は主として主觀的に、自省的に他よりも自己へとその覺醒を催して行かうとする點にあります。

□乍然靜に一步を退いて之を考ふるに、此の兩者は必ずしも永久に相反するものではなくして、二者共になくてはならない一つのものではないかと思ふのであります。即ち此の二つは必ずしも二者永久に二つのものではなく、本來一つの社會の發展の上に、又一つの社會の進歩の上に常に相關して欠く可からざるものであるかと思ふからであります。

□從て、いかに佛教やクリスト教が主觀的であり、自省的であるとしても、またそれがいかに物質主

義を離れた精神主義であるとしても、凡そそれらのことが今日の社會を離れ、現實を離れてはいづこにも、生活の理想も社會の改良もあり得ないからであります。從つて自省の結果、反省の極には必ず實際問題として、之が政治となり政策となつて現實の上に現はれて來るべきは理の當然であるからであります。

□而して、若もそれが理の當然であるならば今日の社會並に將來の人類生活に於て、私共の實際生活がいかにあるべきかを充分に考察し來るとき、少くともそこに人類社會の經濟問題に關係して、その生産と分配とに於て考へらるべきは當然であります。

□然らば今日の資本主義對社會主義に於て所謂眞實の宗教はその何れに組み入るのが本當であるか、之は少くとも今後に立たんとする宗教家の大に注意すべき點であります。

□此の意味に於て、從來の既成宗教、少くとも今日一般に行はれる多くの寺院宗教なるものは可なり私共のマルクスと共に否定せざるを得ない、多くのアヘンが含まれてゐるのではないか。此の點は深く私共の反省すべきところであり、又共に大いに改正を要すべき点でありませう。

□それと共に所謂今日のマルキスト達もたゞ單に社會の改造を一種のマルクス主義にのみ捕はれず、深く人類の理想を考へたならば人はパンのみにて生くるものでないことも自ら明かとなるではないか。人は生きがいある生活を喜ぶ、必ずしもそれはパンのみの生活ではない。

六、眞生の意義

□此の意味に於て、私共は眞生の意義を求めて止まないものであります。そこには衣食の安定を求むることともより生活要求の一問題ではあります。更に私共には永生の自覺を求めて止まぬものがあります。そしてまたそこには單なる物質生活や身体の健康ばかりではなくて、更に永遠の向上をも

亦考へさせられて止まぬものがあるのであります。

□そこにはいかなる形に於て私共が生存するか、私はそれを充分に考へるの経験も資量もない。乍然それが少くとも此の世に於て斯くの如く考へ斯くの如く働く此の身心が人として生存して現實を實に驚く可き一種の不可思議として私は考へさせられて居る。

□その他、此の世の不可思議なることは此の現前に展開せられてゐる宇宙の森羅万象であります。而もその森羅万象の活動して止まない、大自然の力、即ち天地に充てゐる宇宙の力、そこには單なる物理的力のみではないものが充たされてゐるのを見ます。

□而も、宇宙と人生、人生としての私共の生活、そこには單なる動物的生活の方面ばかりでなく、更にまた私共が此の世に於て、宇宙と人生との間にいかなることを考へ、いかなることを行ふべきかと云ふことに於て限りなき向上の世界を見るのであります。神の如き佛の如き、所謂神人の生活を要望する私共の生活を私は自らに嬉しくも亦尊く思はざるを得ないものがあります。

七、永生と向上

□それは自らの生命をして天地と共にある宇宙の生命と一ならしむるの生活であります。謂かへれば私共の生活はやがてまた、宇宙生命の眞實の自覺となるのであります。いつまでも神を禮し、神の僕べとなつてゐた私共の生活は今や神と共に生き、自らも亦神の生活を要望するやうになりました。

□佛陀の生活、即ち釋尊の生活は此の意味に於て私共の最高の理想を現はすものといはねばなりません。凡そ此の世に於て、自ら神となり、佛となるの生活は人間の理想の宏大にして、尊嚴なるものがありませうか。人類の生活は正にこゝに於て眞にその最高を示すものと云ふべきであります。

□神の生活、佛の生活、それは正しく私共の最高の理想であります。そしてまた、それが所謂人とし

ての最高の生活でなくて何でありませう。徒に自ら神を拜むよりも自ら神の生活を營むは人として尊き生活はありません。釋迦やクリストの生活は即ちそれを示したのであります。

□釋尊の佛教、殊に我國に於ける釋尊の大乗佛教は即ち悉く此の人間の成佛を示すの教へであります。謂かへればいかなる人にも皆悉く此の自らの成佛を理想せない佛教とてはないのであります。而てその成佛の教へとは即ち自らに佛たるの教へでありました。

□此の意味に於て、クリストの教も亦神たるの教へであります。『汝等神の如く完かるべし』と彼は我等に述べて居ります。『神の子クリスト』と多くの人は云ふが、クリストの信仰から云へば人は皆神の子でなかつたか。私にはどうしてもさう信ぜられてなりません。

□神の子とは神の道に生るの人を云ふのであります。神の道に生きる外に佛の道がどこにありませう。佛の道と神の道とは決して二つではないのであります。天地の眞理、宇宙の道理、人として眞に生るの道の外に神の道も佛の道もあるものではありません。

□されば友よ、折角此の世に生を受けた限りには今一步自ら眞實に目醒めて眞實の生活に生くべきではありませんか。眞生の道とは即ち神に生きるの道であり、佛の生活に入ることでもあります。(一九三〇、六、二、夜十時) 於東京。(八、五、再校)

【註】 ◎淨土教とさへ云へば今までは多くの場合自分たちには佛になれないものださへ考へねばならぬやうに思はれてゐる。乍然それはたゞ自分獨りの力では佛となるの力が只今ないと云ふだけのこと、その究極に於てまで成佛を言はぬ淨土教と云ふものはない、従つて、淨土往生と云ふことも、淨土に往生して佛となると云ふ意味を含まない往生はないのであります。

だから聖淨の二門はたゞ其の成佛の方法の相違にすぎず、其の佛教根本の解脱の目的に至つては決して別なものではないのであります。

最高峰を目がけて

中村 辨 康

一〇

先頃からマルキシズムと宗教との關係がやかましい問題となつて色々な著作や色々な論議がなされて居りますが、然し佛教に取つては非常に興味ある問題として大分意氣込んで居る人もありますし、またむしろいい刺激になるとして喜んで居る人もある位です。

私達念佛を中心とする者にしましても、其問題から全く離れた無關心な傍觀的態度で、濟ます譯には行かない程、世の中は進展して來て居るのです。

専門的に學問的に探究する事は學識ある其道の人におまかせするとしましても、少くとも佛教を理解し佛教を信じ佛教を愛する者であつて見れば、やはり一應は其事に就て考へて見る義務もありませう。

また夫と反對にマルキストからはむしろ反動思想として排撃を受けるかも知れませんが、我國本來の國民性とか若しくは國體觀念とか云ふものに就ても、モウ一度深く見直して日本人としての意識を再び新らしくして見る必要もありはしないかと思ひます。

個人と云ふものが社會を結ぶ紐帶であつて見れば、社會を顧慮する事なしに自分丈を考へる事は無理だからで

あります。

また何千年と云ふ長い間養はれて來た私達は、其母體たる國體と云ふものの外に私達の思想を飛出さしめる事も全く不可能だからであります。つまり私達から國民性と云ふものを取り去る事は出来ないからであります。又た或人は

宗教は宇宙と自分との關係だ

と申しましたが、夫は形而上學としての哲學から導かれた遊離觀念かも知れません。何したつて社會的關係を超越して直に宇宙的關係を考へる事は、許されるとしても觀念的であり非現實的であつて生活の中心に觸れて居ないのでから、要するに有閑者の宗教でしかないと思ひます。

ですから之を現代的に訂正して

宗教とは社會と自己との關係を正しき視角に依り各人をして人間としての社會的使命に燃え立たしめるものだ

と云つて云へない事もあるまいと思ひます。

而して其社會關係は單に横丈の關係でなく、豎の關係

即ち其民族の歴史を其民族の礎石である意味に於て考慮の中に加へなくてはなるまいと思ふのです。

例へば我が大和民族の祖先が何であるかと云ふ事なども、唯だ漠然と高天原と稱する天國から降りて來たと云ふ事では、餘りに非科學的であり非常識的であります。

近代人がソナナ茫々とした態度ですまされる譯がありません。而してさうした考古的な問題と同時に私達民族の思想史、信仰史云ふものをもふりかへつて「過去の集積」としての私達を根柢から解剖し研究して見なければなるまいと思ひます。

今後の信仰と云ふものは此處に重點を置くべきです。唯だ單に自分の精神安定の爲めにとか、若しくは單なる自己完成の爲めにとか云ふ自我中心の回向であつてはなりません。

無論、入信の第一歩としては夫も結構ではありませうが………

然し唯だ信する事に依つて悩みが取れると云ふ様な觀念的な生やさしい事で終始が出来るなら、世の中は誠に太平無事で丸で蝸牛の生活にひとしいのですけれども、事實は到底そんなことではすまされないのです。

例へば社會問題として最も根本的な「喰へない」と云ふ問題を信仰がさう取り扱ひますでせうか。

夫は社會の問題、政治、經濟の問題であつて、宗教の問題でないと云ふなら、宗教はいよいよ無用の長物になつて仕舞ひます。なぜと申しますに社會の大多數が「喰へない」事に就いて深大な考慮を拂つて居るのに、獨り宗教丈が其問題を外にして獨りよがりをして居るなら、其態度に對して社會は大に排撃しなければならぬでせう。夫では宗教としての社會的生命が無くなつて仕舞ふからです。無論「救はれて居る」と云ふ信念は大切な事です。順縁も逆縁も、皆な私へのよき訓練である意味に於て。

ですから、若し「救はれて居る」と意識するなら、其社會的恩寵に報ふべくモットよりよき社會の建設に努力しなければすまないでせうし、また逆に「救はれざる」生活を意識するならば尙更ら「救ひ有る」理想社會の建設に協力しなければならぬではありませんか。

いづれにしましても私達は

淨佛 國土 成就衆生

の信念をモット、モット深めて社會ヘグングンのび出して行かなくてはならないでせう。

此点はマルキシズムの宗教への排撃に少なからぬ的はづれを感じさせる者でないかと思ひます。あの人達は宗教と云ふものは、社會が客觀的條件に依つて完全な社會

を建設し得ると云ふ事を知らなかつた時代に生れた者だから客觀的條件の改革に依つて地上に天國を建設し得るマルキシズの出現に遇つては當然其影をかくさなければならぬ筈だと云つて居るのです。つまり「救ひ」と云ふ事を主觀的に彼岸の世界にのみ許して、現在の客觀的物質的世界に要求しないと云ふ点に於て、宗教はマルキシズムと丁度正反對の立場に立つものだから、宗教の存在は絕對に許る事は出来ないといふのです。

然るに豈斗らんや。前述の如く宗教は必ずしも個人の「觀念的救ひ」を要求して居ないのです。それどころか寧ろ現在の不完全なる世界を完全なる客觀世界即ち佛國土となさしめんとする念願に依つて、個人が社會へ無私奉公する事を要求して居るものなのです。

即ち有機的機構云ふものは、夫が人體にしろ社會にしろ、或は國家にしろ宇宙にしろ皆な同じ形式を辿つて居るものでありますから、人體に於て見る如く幾百萬の細胞が夫々各自の小生命を保持し乍ら一體の大生命を作り上げて、しかも其大生命を持続せしむる爲めには、全体の小生命の健全を要求しつゝ不健全な分子は惜しげもなく新陳代謝せしめて、小生命の永生に就ては何等の觀慮も用ひて居ないのも同じ意味に於て、社會と私、國家と私との關係を眺めなければならぬのであります。

即ち社會に對しても國家に對しても私達は其一小生命でしかありません。此故に私達が私達自身の永生なり若しくは自分の完成なりを要求するのは無理であり誤りであります。

併し乍ら此處に注意すべき事は此一小生命が何處迄も健全なる状態であるべく必要される事です。而して其健全なる状態とは平凡な様ですが、社會公益を中心とした正業に精進する事でなくてはなりません。

其處には大將もなければ、一兵卒もないのです。此處の階級は階級ではなくして、機關の部分です。其處には何等の特權もないのです。皆な社會生命建設の爲めの同じ一従業員に過ぎないのです。

或は夫はユートピアだと云ふかも知れませんが。ユートピアで結構です。其ユートピアの實現に向つての希念があり情熱があれば、やがて夫に到達し得るではありませんか。其の情熱！其の社會生命の完成への希念！是れ即ち私達の信仰なのです。

此の信仰へは今の處如何なるものも販入すべき筈だと思つて居ります。此信仰こそ現代に於ける最高峰ではないでせうか。少くとも私は之を信仰の最高峰なりと信じて、之に到達すべく常に之を目掛けて居るものだと云ふ事を告白致します。而して此の信念の是非に關して大方の御示教を希望して止みません。

念佛の種々相（其の四）

土 屋 觀 道

一、心なき求道者

□私の考へによれば必ずしも寺に參る人のみが信者ではない。またよく、念佛の話する人のみが決して本當の信者ではない。

○すると、私共のやうに寺まわりや、念佛の話ばかりするものは信者の中間にははいらないのでせうか。

□いや、そんなに直向きから來られては私も困つてしまふが、私の云ふ心は寺まわりや、念佛の話するもののみが信者でないと云ふことは、寺まわりや念佛の話などあまりせぬ人にも可なりの信者があると云ふことを云ふのであつて、寺まわりや念佛の話する人が信者ではないと云つたに過ぎない。

○然し、寺にも參らず念佛の話もしないやうな人がごうして信者になられるでせうか、寺にも參り、念佛の話もする云ふ位の人にして、はじめて本當の信者とも云ふべきではないでせうか。

□それも、一應の道理はある。乍然、私の意味する寺まわりや念佛の話は眞に其道を求むるの人について云ふの

であつて、それ以外にも随分寺まわりや念佛の話に夢中になる人がないとは限らないからである。それに、本當に寺まわりをし、又念佛の話をするほどの人ならばそれにもまして日常の生活が本當の生活になつて來ねばならぬではないか、然にそのことがそれらの人にない云ふことは全く其の道を未だ知らない人と云はねばならぬ。

○それにしても、未だ眞生の道が開けねばこそ、寺にもまわり、又念佛の話をも聞きたいのです。然にあなたのやうに寺まわりの人を批難したり、念佛の話する人を嫌はれるやうでは之からの人々は益々寺まわりや念佛の話をする人は少くなるのではありますまいか。

□或は全くさう云ふ時代が來るかも知れぬ。乍然それ位のことで寺まわりや念佛の話する人が少くなる位なら、初めからそんな人は來ても來ないでもよい人であつて、つまるところ、そんな不熱心な人々は初めから信仰も何にもない人だから、それはごちらでもよいことになる。

否、それどころではない、つまるところはそんな人々が少くなり、來なくなる云ふ事が本當の道士がまた集ることにもなるから決してそれは悲しむべき事ではない。

○さうすると寺にもまゐらず、念佛の話もしない人にして、本當の信者があるとは一体どんな人でありませうか。

□それは寺にばかりおまゐりしても、本當の道を探むる心のない人のあることを知り、また、念佛の話ばかりはするものゝ本當の念佛の申せない人のあることをよく知れば私の言ふ意味がよく判る。

(續)

唐澤の集い

□今年のやうな不景氣な年には定めし急しいので集る人も少なからうと思つて居りましたのに、愈々となつて見れば其の割に集る人も多かつたことは私の衷心から喜びとするところであります。

□殊に集るもの九十四名の中、初めての人が六十名からに及んでゐることは例年にないことであります。之はひとへに新しき道友の増し行く事實を示してゐるものであります。會の前途には可なり大きな光を見るものであります。

□尤も此の中には人から勤めらるゝまゝに集つた人もないとも限らぬ、又中にはいやいやながらに引つぱられて

來た人もあるかも知れません。乍然其の集る動機のいかなるものにせよ、愈々集つてからの道友の心が深く信仰を中心として、人生の眞意義に目醒めて進んで頂いたと云ふことは私の深く喜ぶところであります。

□それにしても、再三已に登山せられた方々にして、それらの人々に心からなる求道の友となり、身自らも亦眞剣にその道をいそしまれた人の多かつたと云ふことは全く近來にない嬉しさでありました。今年と云ふ今年ほど道友の中に限りなき睦みと精進の心を感じたことはありません。

□それに、今回の集りにはさうしたわけか、青年の人の多かつたことと、更に求道の士として色々の問題を持つた人の多かつたことは確に此の集りの一つの異りでありました。人生誰が苦ならん、而も各人が其の苦の何たるかを發見し、此の苦を脱せんことにいそしむと云ふことは特に此の集りの尊いところであります。

□其の他、或は家庭の上に、思想の上に、社會問題として新しき思想の持ち主もあつたやうでありましたが、之等のことも如來中心の眞生運動には一として心から共鳴しない人とはなかつたやうであります。中にも戀愛問題、生活問題、思想問題など可なり深く實際問題に苦惱せる人々が今度の集りで喜々として此の山を下られる

有様は全く今までにない多くの獲物でありました。

□尙今後の眞生運動に對して、新たな發展の道を考究し、更に各地宣傳の準備方法等についても各自が我ものとして之を考へて頂くやうに進んで來たと云ふことも確に一つの進歩でありました。

□乍然このころは已に各地の道友の常に心を痛めてゐるところであらう、又それなればこそ眞に生るかいもあるとして、常に勇んでゐるところであります。此の点はお互に喜んで頂き度いところであります。

□尙最後につけ加へて置きたいことはいつも乍らのことではあるが、今年と云ふ今年はそれこそ文字通りの全會一致で萬事が楽しく其の道にいそしまれたと云ふことと特に上諏訪町の道友の方々が全力を注いで急がしい中から、そのすべてを獻げて私共の爲めに唐澤の台所の方面一切の御世話をお願いしたと云ふことであります。之は私一人の深き感謝であるばかりでなく、道友の集いのすべてが心から感謝措く能はないところであります。

□それにつけても、心から唐澤の集りにも集りたい人々其の他色々の事狀の爲めに此の集いに参加のできない人で深く此の道に精進してゐられる方々に對して私は衷心から此の一言を獻げたい、それは唐澤の念佛のみが私共の念佛ではない、否それどころか本當の念佛は皆様のや

うに唐澤の集りにも集ることができない人々に於て、眞の念佛ができる爲めの唐澤の集りであると云ふことであります。

□言かへれば、唐澤の念佛は修養の爲めの念佛にすぎない、即ちそれは一種の別時念佛である。乍然本當の念佛眞の生活はむしろ、山を下つて實際人類の生活に立つところになつてあると云ふことを心して頂きたいと云ふことであります。

□その意味から言へば唐澤の三昧會は少々すぎる念佛である。だからともすれば一種の避暑念佛となり、或は又一種の娛樂の道場たらんとする傾きがないとは限らない。此の点は常に私の憂いとするところでありましたが乍然いつも實際社會の苦惱の中にのみもまれた人々には時たまにはかうした人里離れた神境に心から其の身心を休めると云ふことは以上の弊害にも増して尊いものゝあることを覺ゆるものであります。

□従つて之は用ゆる人の心掛け一つと云はねばなりません。願くは今後とも私共道友の集りはすべからく人生の眞義を解し、精進努力如來の慈光を中心としてまた無き眞生の大道に立ちて頂きたいと云ふことであります。

(八、六、朝)

上諏訪町 〇長野縣

山田たけ子
飯田せい子
宮坂きわ子
安藤百重子
藤森善左衛門
小松次郎子
小尾英一子
田村久雄子
菊地武之助
武居てる子
小口秀子
飯田あみ子
宮坂睦子
河西よし子
飯田榮子
宮坂隆子
松尾明三郎
山口常照
片岡憲三

仁川寺町六十一 〇朝鮮
吳市海岸通 〇廣島縣
三重郡楠村 〇三重縣
津市上濱町
飯南郡大石村

〇壹圓宛岐阜栗野準一様
〇壹圓宛佐野眞太郎様
〇壹圓宛重松茂吉様
〇壹圓宛中野榮吉様
〇壹圓宛鹿兒島立山祐右衛門様
〇四日市恒川篤一様
〇福岡山眞次郎様
〇大板金谷眞定様
〇西池成輝様
〇廣島三

誌代拂込者御芳名

本誌定價

一	一	一
年	年	年
金	金	金
一	六	十
圓	十	錢
全	錢	郵稅共

意注の文記

●贈諱希聖者は代金を添へて御申込下さい

●諱代は總て前金御拂込の事

●送金は振替によるのが便利
です

昭和五年八月二十日發行
東京市芝區芝公園十四號地九番
發行所 編輯人 土屋觀道
名古屋市西區隅田町二一番地
印刷人 百々治之助
電話(五)二九三番
名古屋市東區鍋屋町二丁目
印刷所 豐田山活版印刷所
電話(東)四六五五、七五五五
東京市芝區芝公園十四號地九番
發行所 眞生社
振替口座東京四七二八八番

昭和五年八月十五日印刷納本
昭和五年八月二十日發行
（每月一圓十二日發行）
第九卷第八號

發行所 眞生社
振替口座東京四七二八八番